

鶴松遺跡Ⅲ

(中部電力株式会社地中配線工事)
に伴う緊急発掘調査概報

1983

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和57年度ハウス食品株式会社工場建設による中部電力株式会社地中配線工事に伴い、^{つた}袋井市教育委員会が実施した、鶴松遺跡の緊急発掘調査概報である。
2. 鶴松遺跡は、昭和47年、昭和57年2月～3月の過去2回行なわれており、今回の調査を第3次調査として整理した。
3. 本調査は、袋井市教育委員会社会教育課文化財係寺田義昭、松井一明を発掘担当者とし、静岡県教育委員会文化課の指導を得て実施した。
4. 調査、本書刊行に係る事務について、袋井市教育委員会社会教育課文化財係が行なった。
5. 本書の編集、執筆は松井一明が行なった。
6. 挿図、図版の作成は、松井、早川保子、高野由美子が行った。
7. 本書で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
8. 3 T S D 2 出土の繊維遺物については、布目順郎先生より玉稿をいただいた。
9. 本調査、本書刊行については、中部電力株式会社、及び工事関係者の方々に全面的協力、御理解をいただきました。記して感謝の意を表します。
10. 本調査、資料整理参加者、協力者は次の方々です。(敬称略)
浅井征江、寺田せつ子、寺田ひで子、仲根世始子、鈴木咲子、名倉保子、久野てるみ、紋谷より子、榊原かね子、森永明美、高野由美子、早川保子

目 次

1. 調査にいたる経過	1
2. 調査方法・経過・調査整理体制	1
i) 調査方法 ii) 経過 iii) 調査整理体制	
3. 周辺遺跡の動向	3
4. 遺 構	4
i) 1 トレンチ ii) 2 トレンチ iii) 3 トレンチ iv) 4 トレンチ	
5. 遺 物	9
i) 中期後葉の土器 ii) 後期後葉の土器 iii) 小形土器・土製品、石器	
6. ま と め	15
付載 鶴松遺跡出土の隸について	布目順郎 17

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡群	2
第2図	遺跡の周辺地形図	3
第3図	発掘調査区配置図	4
第4図	第1トレンチ(1)遺構平面・土層図	5
第5図	第1トレンチ(2)(右)第2トレンチ(左)遺構平面・土層図	6
第6図	第3トレンチ遺構平面・土層図	7
第7図	第4トレンチ遺構平面・土層図	8
第8図	土器実測図(1)	10
第9図	土器実測図(2)	11
第10図	土器実測図(3)	12
第11図	石器実測図(1)	13
第12図	石器実測図(2)	14

図 版 目 次

図版1	1. 遺跡遠景 2. 1トレンチ全景 3. 1トレンチ南半微高地
図版2	1. 1トレンチSH1 2. 1トレンチ北半有機土層検出状況 3. 有機質土層内土器出土状況
図版3	1. 2トレンチ全景 2. 4トレンチ全景 3. 4トレンチSH4
図版4	1. 3トレンチ全景 2. 3トレンチ全景 3. 3トレンチSD1
図版5	1. SD1中層遺物出土状況 2. SD1遺物出土状況部分 3. SD2
図版6	1. 3TSD1出土土器
図版7	小形土器、磨製石鏃、ノミ形石斧、扁平片刃石斧、打製石斧、敲石、削器、柱状片刃石斧
図版8	第1図 繊維の面、第2図 前図反対面、第3図 経糸の1つの断面、第4図 緯糸の1つの断面、第5図 経糸繊維の断面転写図、第6図 緯糸繊維の断面転写図

鶴松遺跡第3次緊急発掘調査概報

1 調査にいたる経過

新池地区に建築が予定されているハウス食品株式会社袋井工場に供給する電力については、山科の中部電力変電所より行なうことになった。その際変電所からのケーブルに関しては、地下に埋設して行なう工事となり埋設工事区域は鶴松遺跡のほぼ中心部にあたり、その取り扱いについて、中部電力電気工事関係者より教育委員会に昭和57年5月に連絡があった。鶴松遺跡については、1972年に第1次の発掘調査が行なわれ、良好な弥生時代中～後期の住居跡、遺物が多数見つかっており、重要遺跡として注目されていた。今回の工事でも、巾1mながら弥生時代の遺構面の現状変更が予想されるため、工事の際遺構の残存状況を教育委員会担当者が立ち合い、良好な遺構、包含層が発見された場合発掘調査を行なうことを確認した。

工事は、7月と8月の2期に分けて行なうことになったため、調査計画も2期に分けて計画した。7月の調査で、遺構が希薄と思われた地域まで遺構の分布範囲が広がることが判明したため、7月、8月調査分とも発掘調査を行うこととした。

2 調査方法・経過・調査整体制

i) 調査方法

調査区域は、巾1mほどのトレンチと部分的にマンホールの区画がある狭い調査区であったため、それぞれ1～4トレンチと名し調査を進めた。遺構名は、各トレンチごとに記号化して設定した。遺構実測図面は20分の1縮尺を基本とし、必要に応じて10分の1の縮尺図を作成した。写真撮影には、35mmサイズ原画（白黒、カラーリバーサル）を使用した。

ii) 経過

昭和57年7月19日～7月24日 立ち合い調査の結果、良好な遺構が発見されたため本調査としたが、1トレンチと2トレンチの間については遺物の包含が少ない有機物混り粘土層（ビート層）や、遺構の発見がまったくなかった地域であり調査対象から除外した。1トレンチ、2トレンチとも多数の遺構が発見されたが、1トレンチ北半の粘土層は非常に厚く、巾1mの調査区のため、安全のための包含層の完掘は行なえなかった。

同8月21日～8月26日 3トレンチ、4トレンチの調査を行なった。主要道内での調査のため、車の振動、排気ガスの中での調査となった。各トレンチとも多数の住居跡が複雑に切り合い、新旧関係の把握が難航した。3トレンチSD1とした溝中より土器が多数出土し、弥生時代後期前半の良好な資料をえることができた。実測後、写真撮影を行ない調査を終了した。

iii) 調査整体制

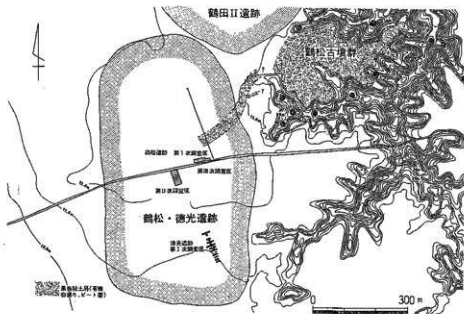
調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 静岡県袋井市教育委員会 教育長 鈴木勲一



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡群

社会教育課長兼文化財係長 永田新作
 指導主事 寺田義昭（調査担当者）五島康司
 文化財係 吉岡伸夫 永井義博 松井一明（調査担当者）



第2図 遺跡の周辺地形図

3 周辺遺跡の動向

袋井市域、及びその周辺地域に展開する弥生時代遺跡群はいくつかにグルーピングできることはすでに述べた。(文3)なかでも、鶴松遺跡を中心とする、太田川中流域の自然堤防上に立地する第7グループの状況は、後期集落の拡大を知るうえでの典形として注目されてきた。

過去の調査においては、中期～後期、古墳時代前期の遺構、遺物が発見されている。鶴松・徳光遺跡の範囲のうち、徳光遺跡とされた東名袋井インター地点では後期後半、古墳時代前期の遺物が出土し、今回調査地点～第2次調査地点あたりに中期の遺構が集中し、後期になると次第に周辺地域に居住域を拡大していったと思われる。

一方周辺に位置する、土橋遺跡、鶴田II遺跡は、後期の土器を出土することが知られており一連の自然堤防上の別地点の微高地上にも集営が営まれるようになってきている。

こうした現象は、単に人口増加によるものとも考えられるが、水田経営の技術上の理由で多数の水田地の確保が必要となり、広範囲に広がった水田地の管理を行なうための計画的な分村を行ない、計画的な水田経営を行ないうるテリトリーの確保という現象とも捉えられよう。

また、これら共同体構成員及びその首長を葬ったと思われる墓地の問題であるが、遺跡内での確実な例は知りえない。ただし、昭和56年度調査の鶴松古墳群の中には、弥生時代の墳墓と思われるものが含まれているようである。(文1)仮に鶴松古墳群中に、墓墳を求めるとしても基数から見てあまり多いものでなく、いかなる性格の被葬者なのか注目されるところである。

*) たとえば、浅耕、土壌還元による地力低下、及び地力低下に伴う病虫害の発生等により生産力が低下した水田に代る水田地の確保とも考えられる。

4 遺 構

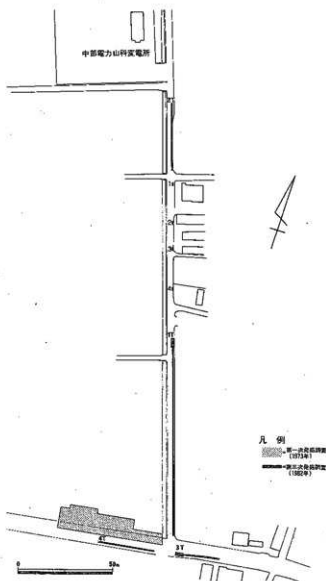
i) 第1トレンチ

第1トレンチでは、竪穴住居跡3棟（SH1～3）、竪穴1ヶ所（SI1）、溝2本（SD1～2）等の他多数のピット群が発見された。これらの遺構群は、トレンチ南端より約50mまでの範囲に分布している。この範囲の基盤層は、細砂礫を多く含むシルト層で太田川が形成した自然堤防上にあたると思われる。竪穴住居跡の平面形は、調査区域が狭いため判然としないが、第1次調査では楕円形、隅丸方形等の住居跡が検出されている。（文6）またSH1～2

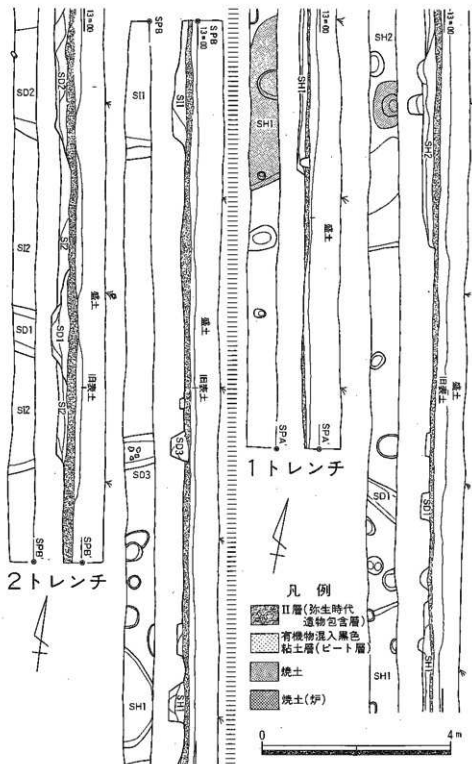
は、床面が焼けており焼失家屋と考えられる。

各遺構の時期は、遺物が少なく確定的ではないが、SH1、3、SD1は後期前葉、SH2、SD2については明らかでないが、後期前葉を主体とするのではないかと推定される。

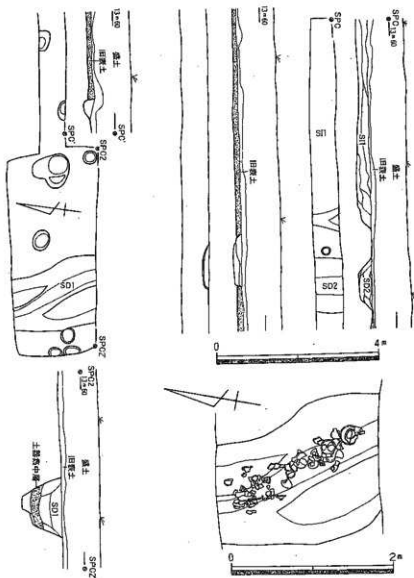
第1トレンチ南端より50m以北は、草等の湿水性植物の遺骸が腐蝕きあっておらず泥炭化している黑色粘土層が厚く堆積しており、その範囲は第2トレンチ—4グリッドでは確認されていないことから、南北方向約60～80mの巾で湿地帯が広がっていたと思われる。無遺物層まで掘り上げることができなかったが、出土遺物の傾向は、中層では後期後葉を主体、下層では後期前葉～中期後半の遺物を主に包含するようである。この湿地帯はおそらく遺跡東方に展開している丘陵の小支谷よりの流路の1つであろう。また、同じような泥炭化した黑色粘土層は鶴松古墳群の所在する谷間でも確認されている。（第2図、文1）



第3図 発掘調査区配置図



第5図 第1トレンチ(2)(右)第2トレンチ(左)遺構平面・土層図



第6図 第3トレンチ遺構平面・土層図

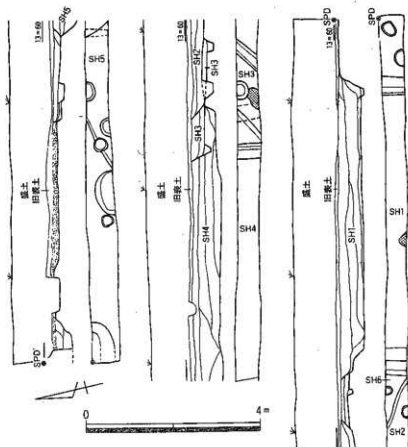
ii) 第2トレンチ

第1トレンチより北方90mに設定した調査区で、第1トレンチ、第2トレンチ間については、4ヶ所試掘坑を設定し遺構の所在状況を確認したがまったく遺構は見られなかった。

第2トレンチでは竪穴住居跡（SH1）、竪穴2ヶ所（SH1～2）、溝2本（SD1～2）が検出された。遺構はいずれも後期前葉で、第1トレンチと同様の傾向を示した。遺物包含層は、さらに北方に連続し遺跡の広がりを示している。

iii) 第3トレンチ

第3、第4トレンチは、東西方向にのびるトレンチである。第3トレンチはマンホール部分があるため、一部拡張して調査した。竪穴1ヶ所、溝2本、柱穴と思われるビットが確認され



第7図 第4トレンチ遺構平面、土層図

た。SD1とした溝状遺構は、断面V字形をなす人工掘削の溝で2段の段状をなしている。遺物は、下段の溝部分が埋まった段階にはほぼ下段の流路上層に土器を一括廃棄している。土器は完形のものは少なく、口縁部、胴部、脚部等各部分に分割され廃棄されている。時期は後期前葉の土器組成を示している。この溝は、おそらく第1次調査時に検出された溝状遺構に連続するものと思われる。SD2からは、中層より布と思われる絹繊維遺物が出土した。詳細については付載の布目先生の論考を参照されたい。伴出土器は後期前葉である。

iv) 第4トレンチ

第4トレンチは、合計6棟の堅穴住居跡が互いに切り合い集中して検出された。住居跡平面プランは不明である。SH1、3で地床炉、SH1、SH3等で壁溝が発見されている。各住居跡の時期は、中期後葉～古墳時代前期までで、以下切り合い関係等も含め整理した。

時 期	中 期 後 葉	後 期 前 葉	後期後葉～古墳時代前期
切り合い 関 係	SH6?		→ SH1
	SH4 → SH3 ↓ SH5	→ SH2	

5 遺 物

i) 中期後葉の土器

器形を推定しうるものに3TSH3出土の土器1、2と1T黒色粘土（ビート層）層下層出土土器23、24の壺形土器がある。

1、23は単純口縁の細頸壺で、1は口唇部をやや外反させるように丸くおさめている。22については、口唇部に面をつくり胴部は大きく張り下半で、くの字状に屈曲させ底部にいたる。肩部は緩かに曲線をえがいている。胴部文様なへう状工具で区画を行なったのち、櫛状工具で細格子目文を施しミガキ調整でさらに区画の効果を高めている。23もおそらく22と同様な器形となろうが、やや胴部の屈曲は弱い。前者は細頸壺A2類、後者は同A1類とした。

2は短い頸部の広口壺で、受け口状口縁をなしている。胴部は大きく張り、胴部下半に最大径をもつ無花果形を呈する器形であろう。同器形で頸部の長いものを広口壺A1類としているため2のような短頸部のものをA2類とした。

ii) 後期前葉の土器

竪穴住居（SH）、溝（SD）より出土しているが、本概報では3TSD1出土の一括性の高い土器群の主なものについて報告したい。壺、甕、高坏がある。

壺形土器

全形を知りえるものがないので主に口縁部形態で分類してみた。

口縁を内彎させ口唇端部に面をつくる細頸壺C2類となる4、単純口縁であり外反せず直線的に開く細頸壺B2類の3・5、太頸で大きく外反した口縁、口唇端部に広い面をつくる広口壺A類の7、受け口状口縁をなす細頸壺D類の6からなる。ほかに小破片で図示しえなかったが、大きく外反した口縁で折返し口縁をなす細頸壺A1類が認められた。

以上まとめると、細頸壺はA1、B2、C2、D類、広口壺A類が見られた。

胴部形態については8など胴部下半に最大径のある無花果形を呈するものが知られている。

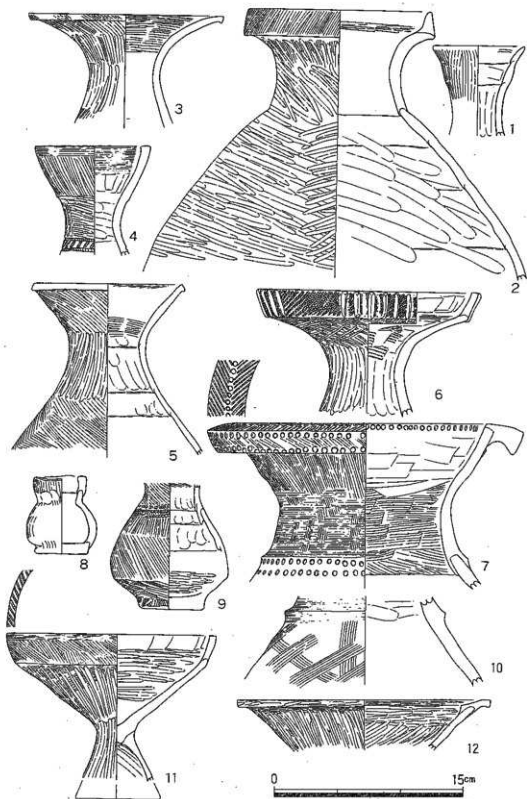
高 坏

全形を知りうるものはなく、口縁部形態で分類してみた。

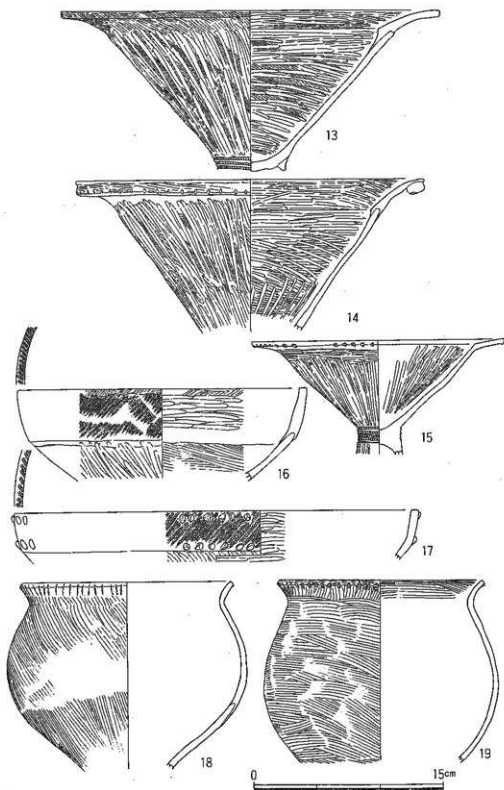
鐔状口縁をもち大きく開いた鉢状の坏部をもったものをA類とした。図示していないが脚部はやや開いた筒形で、下端で屈折した形態をなすが、まれに屈折しなく直線的に開くものや、外反気味に開くものがある。口縁部は単純口縁で、口唇端部に面をつくりそこにキザミ目や縄文などを施すものをA1類（12、13、15）、小さな折返し口縁をなすA2類（14）がある。

また10のような受け口状口縁をなすものをB類とした。脚部は、直線的に開き台付壺脚に類似する。16、17もあるいはB類とも思えるが、鉢形土器A類と区別がつかない。口径30cmをこえる17は高坏B類か、広口壺D類としたほうがよいだろうか。高坏A類、B類とも口径15～20cmの小形品（11、12、15）と、25cm前後の大形品（13、16）の2種がある。

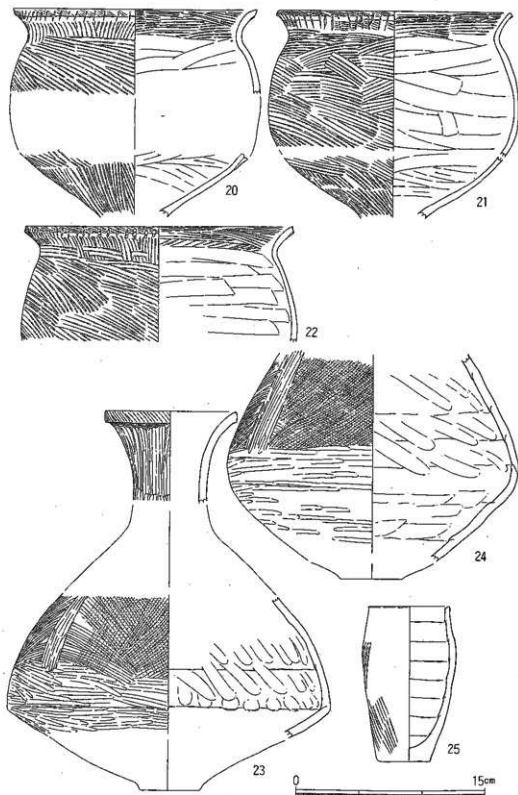
脚部文様は、13、15のような数条の横紋突文が施されるもの、1～2条の三角凸帯文などがあり、壺形土器の肩部文様と類似する。



第8圖 土器実測図(1)(1・24TSH3、3~123TSD1)



第9圖 土器実測図(2)(13~193 TSD 1)



第10図 土器実測図(3) (20~22 3 TSD 1、23、24 4 Tビート層下層
25 2 TSD 2)

壺形土器

台付壺と思われるもので、胴部はいずれも球形をなすが、下半がやや屈曲するような20、なだらかに連なる18、19、21がある。前者をA1類、後者をA2類とした。口縁部のキザミ目は、深く小さな19と浅く長く行なう18、20～22がある。ハケ目調整は、19～21のような口縁部タテハケ目、胴部斜行ハケ目、胴部下半タテハケ目のものと、18のような全体的にタテハケ目のみを施す2種がある。口縁はいずれも短く、くの字状に外反し口縁部に面をつくる。

iii) 小形土器・土製品、石器

壺形の小型土器の8、筒形を呈する無頸壺の25がある。8は1トレンチ黒色粘土層下層の出土のため中期後葉～後期前葉のもの、25は第2トレンチSD2より出土しているため、後期前葉の時期と思われる。ほかに、3TSD1より挙大の粘土塊を焼成した土製品があるが、用途は不明である。

石器は本調査で第12図7、9の2点が知られ、他に1次調査出土石器を参考に説明する。

1、2は三角形で、基部に若干快りを入れている磨製石鏃である。片岩製で、1は重量3.7g、2は3.1gである。1は孔が完通しておらず、あるいは未成品とも考えられる。

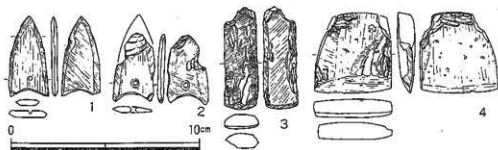
3は小形のノミ形石斧で、直線的刃部をもつ、基部は使用のためか、欠損している。4は扁平片刃石斧で、基部に着装のためかあるいは使用による欠損か、荒い剥離が見られる。3は重量10.3g、4は30.4gで、いずれも片岩系の石材を利用している。

5、6は柱状片刃石斧で、断面形はやや丸みをおびている。6の中央両側縁部には、着装のための快りを敲打により作出している。横斧として使用していたものであろうか。5は、刃部に敲打痕が認められ、敲石としても使用していたらしい。重量は5は479g、6は328gを計る。

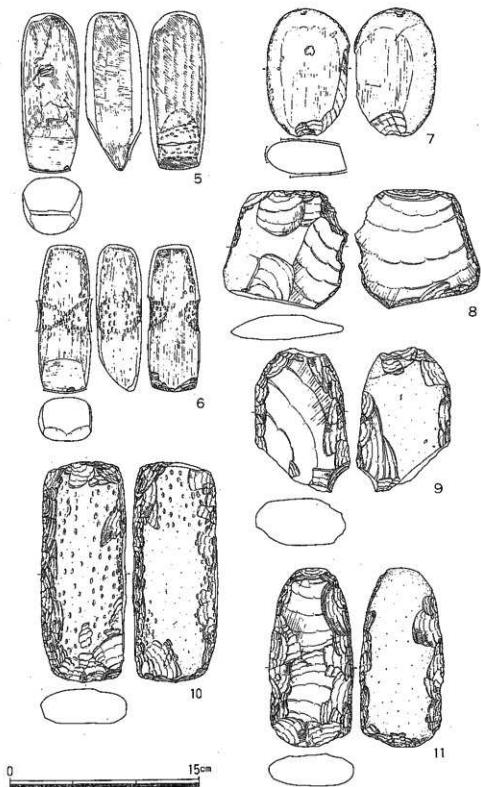
8は砂岩製の薄手の大形剥片を利用し、両側縁に細かな剥離が見られる。削器あるいは、石包丁のような用途が考えられる。一部自然面を残している。重量229gである。

7は、側縁に敲打、上下両端に剥離、表裏面に擦痕が観察され、敲石、スリ石として使用されたものである。砂岩製で重量252gを計る。上下両端の剥離は、敲打によるダメージである。

9～11は扁平な打製石斧であるが、刃部が若干研磨されており、局部磨製石斧とすべきものかもしれない。10は1次調整の敲打痕が観察できた。重量は10は639g、11は357gである。



第11図 石器実測図(1)(1～4 1次調査分)



第12図 石器実測図(2)(5、6・8～11:1次調査分 7・9:3次調査分)

6 ま と め

今回の調査では、巾1mの狭い調査区ながら、鶴松遺跡についていくつかの新しい知見を得ることができた。この新しい知見よりの成果の要約と問題点をまとめてみたい。

まず、住居跡を含む集落の状況を考えてみたい。住居跡と思われるものは、1、2、4トレンチいずれからも検出され、3Tからも掘立ないし住居跡と思われる大形の柱穴が発見されている。4トレンチの住居跡については、中期後葉のもの4軒、後期前葉1軒、後期後葉～古墳時代前期1軒とやや中期の住居跡が多いように思える。第1次調査分については、柴田氏の5戸分についての分析によると、中期後葉3戸、後期前葉2戸という結果がある。(文7)1トレンチ、第1次調査地点付近で、中期後葉～後期前葉の居住域で住居跡の切り合い関係から見ても、かなりの居住密度が高い地区であることがわかる。

1トレンチ北端では、鶴松古墳群の立地する丘陵支谷からと思われる湿地性の流路(巾60～80m)が確認された。一応2トレンチとこの流路間に遺構は発見されなかったことから、2トレンチから見られた後期前葉の住居跡と、1トレンチ、3トレンチ発見の住居群とは区別されよう。2トレンチ包含層中よりの遺物から見て、中期のものはなく後期前葉からの居住域と考えられ、同じ状況の鶴田Ⅱ遺跡との関連性が注目される。

一方西に目を転ずると、第2次調査地点では中期中葉頃の溝、ビット群、後期前葉の溝、古墳時代前期頃の溝が検出されている。(文2)南端の徳光遺跡第1次調査地点では、後期後半の溝が検出されており、古墳時代前期の遺物も発見されている。(文4)

以上のことから、鶴松・徳光遺跡の集落構造を類推すると、集落は第1調査区～第2次調査区で中期中葉から出発し、第1調査区付近で中期後葉～後期前葉に居住のピークをむかえる。遺物の点から、後期後半～古墳時代前期まで集落の存続すると思われるが量的には減少する。鶴松遺跡の中心部の遺構数が減少する後期中葉の時期は、むしろ、第2トレンチ付近、徳光遺跡第1次調査地点などの周辺部に居住域あるいは遺構から広がっていくようである。またこの頃、土橋遺跡、鶴田遺跡群などが出現してくることから、これらの新興集落と鶴松遺跡中心域の動向が何らかの関係をもつことは間違いないだろう。

遺物については、3TSD1より後期前葉の遺物が発見され、出土状態から一括性の高いものと思われた。後期前葉全体に触れる、土器組成、型式分析を示す紙面、時間的余裕もないため、ここでは問題点の提示にとどめたい。

組成としては壺形土器、細頸壺A1、B2、C2、D類、広口壺A類、高坏A1、A2類、B類、甕A1、A2類が知られた。

細頸壺A1類は、第1次調査、第2次調査、大門遺跡第3次調査北区土壌(文3)などの資料から見ると、壺形土器としては主体的位置を占めるにもかかわらず、SD1資料中では非常に少なく、むしろ各型式のバリエーションが多く、比重としては細頸壺B2類が多いように思えた。また、細頸壺C2類は、西遠以西の土器(伊場受口壺A1類、文6)の影響下に成立をするものと考えられ、一型式古く位置づける考え方もあるが、本資料、大門遺跡資料から見ると後期

前葉段階までは普遍的に存続している。

高坏A1類はB類とともに後期前葉の基準ともなってきたもので、SD1資料中も主体を占めた。高坏A2類については、後期中葉以降とされ、A1類→A2類への型式変化が考えられてきている。(文8) SD1資料中には、少ないがA2類と思われる高坏が他にも小破片がある。また大門遺跡土壌中にもA2類が存在しており、A1類→A2類への出現の増加量の変化はあるにしても、単純口縁から折り返し口縁という単純な型式変化とは促らえられないだろう。むしろ、坏部、脚部形態の型式変化は促らえられそうである。天竜川以東の高坏の口縁部形態は壺形土器(細頸壺)の口縁部形態と密接に関連しあっており、後期前葉段階において、すでに細頸壺A1類に折り返し口縁が採用されており、それが後期中葉段階以降にわかには高坏A2類として出現するとも考えられない。こうした高坏A類、細頸壺との関連はたとえば高坏の脚部文様と、壺形土器の肩部文様が相互に関連しあっている可能性はすでに述べた。

高坏B類については、脚部、坏部までの作りは高坏A1類よりむしろ、台付甕との関連が指摘でき、口縁部については後期前葉から普遍的に見られる鉢A類や細頸壺D類との関連が考えられる。基本的には高坏B類は、台付甕と鉢、甕の形態から影響を受けており、西達地域以西に分布するV様式の高坏群とは様相を異にしており、形態的には他の形式との混同が見られる特徴がある。

甕については、A2類としたものが新出の要素になる型式かもしれない事しか考えられなかったが、胴部、口縁部形態の型式変化はおえるであろう。

以上不十分であるが、気がつくままに記述してみた。

石器については、本調査分、第1次調査分から中期後葉～後期前葉の石器群の組成を示したと思われる。現状の資料の中では、一応柱状片刃石斧が中期後葉までと思われ、打製石斧、磨製石鏃、小形ノミ形石斧、肩平片刃石斧などは後期前葉まで残存してくるようである。このことは鉄器の普及との関連で促らえることが可能であるのか、鉄器普及の先進地域とされる畿内以西域Ⅳ～Ⅴ様式併行期の石器群のあり方との比較が問題となろう。

また、薄手の剥片を利用して作られた削器としたものであるが、近年の静岡市有東遺跡などの調査で多量に発見されてきており、石包丁的な穂の穂づみ具として使用されていたとも考えられる。なお、石包丁は磐田市御殿・二之宮遺跡で1点発見されているものの(文5)、普遍的に見られるものではないため、中達～駿河ではこうした剥片削器に注目したほうが良いのではないだろうか。

最後になりましたが猛暑の中、狭い調査区の中で作業に従事して下さいった作業員さん、また応援にかけつけて下さった人、中部電力工事関係者の方々には、多大な協力、援助をいただきました。また中部電力株式会社には、袋井市の埋蔵文化財行政に御理解をいただき、ここに発掘調査を無事終了することができました。こうした方々にお礼を申し上げます。また、玉稿を寄せていただいた布目先生には色々の御配慮をいただいたお礼を申し上げるとともに、概報刊行までの手順が悪く多大な御迷惑をおかけしましたこと深くお詫びいたします。

(付載)

鶴松遺跡出土の緯について

京都工芸繊維大学名誉教授 布 目 順 郎

鶴松遺跡第3次調査に際し、3トレンチ最東端の溝底部近くの砂質層から織物片が出た。1982年8月23日のことである。この織物は、はじめは約8cm×8cmの大きさであったが、採取後の過程で約16片に分割してしまったという。筆者はその小片を少数持ち帰って調査したので、ここにその結果を報告したいと思う。

(1) 織物とその材質等についての調査

出土の織物は細密な平織で、経・緯糸ともに2本宛併糸されている。(第1図)

織物の片面には漆様の膜が全面に付着していて、その膜面には1cmにつき14本×14本の粗い織物の痕跡に似たものが全面にみられる。膜の色は灰黒であるが、織目(?)間隙に相当する部分はいずれも黄褐色で、円丘状に隆起しており、かつ、その部分には小さな亀裂がみられる。

(第2図)

織物の緯糸方向及び経糸方向の切断面は第3、4図に示す通りで、この両図でみる織糸の幅は、経糸が約0.19mm、緯糸が約0.16mmであり、織物の厚さは約29μである。漆様膜層の厚さは16~29μで、第4図にもみられるように、この膜層と織物とは密着しないで、その間に隙間のある箇所も存する。この膜層の断面の色は黄褐色で、漆様物質が繊維と繊維の間隙にも浸入しているさまが観取される。織糸の外面に黒色粒子が多数みられるのは、土粒子の類いかと思われる。

経・緯糸の断面には織糸を構成する繊維の横断面が多数みられ、それら繊維断面の形は家蚕のものと同じである。すなわち、この織物の材質は明らかに絹である。

(2) 緯としての性格(他の緯と比較して)

織糸に併糸が認められかつ織りが細緻であれば、緯の名でよばれる高級平織物ということになる。緯は漢代出土品に多くみられるが、漢代に相当するわが弥生時代中期遺跡出土の絹織物にはみられない。「魏志」に「倭人伝」に、倭国の産物として緯を挙げている。その時代は弥生時代後期にあたるが、そのころの緯の実物はまだ発見されていない。

わが国での緯の出土品で最も古いのは、古墳時代前期に属する福岡県一貴山鏡子塚古墳及び太宰府市菟瀬浦古墳のものである。古墳時代中期になると、緯の出土品は増すが、同後期には減少する。

奈良時代の緯としては、正倉院に1例存するのみである。しかし、この品は密に織られているが、その織糸に併糸を認めず、かつ、この品を緯と呼ぶようになったのが明治になってからであるといわれることから、これを緯とすることには些か抵抗を感じる。

平安時代以降の緯の遺品は皆無であるが、文献としては、平安初期に書かれた『延喜式』や、

同後半期に書かれた『猿蓑記』に縁の名がある。鎌倉時代以降のことはよくわからない。

鶴松遺跡出土の縁の性格を知るために、その繊維断面計測値と織密度を、筆者がかつて手がけた日本及び中国の縁での調査値(第2、3表)と比較すると、繊維断面計測値については、鶴松遺跡の縁の値は完全度・面積ともに異常に小さい。繊維断面計測値を比較する際に、完全度よりも面積の方により高い信頼度が置けることから、断面積を主体にみるとすれば、その値は日本のものよりも中国漢代の値に近い。

織密度については、日本のものとの比較では、古墳時代前期の値に最も近く、中国のものとの比較する場合は、経糸数では北朝～唐初、緯糸数では漢代(特に陽高)の値に近い。そして、何よりも特徴的なのは、経・緯の織糸数が等しいことと織目が透いていて織密さにやや欠けることで、これらの点が、一般の縁とは異なる。しかし縁の名で呼んでも差支えないであろう。

(3) 用途、年代等

鶴松遺跡の縁がどのような用に供されていたかについては、漆塗技法の1つである布着せ(塀塗)のためのものであったとみるのが至当であろう。これは、麻・絹・木綿などを糊漆(上新粉の糊と生漆の混合物)で木や皮などの素地に貼り付ける工程であって、器を堅牢にし、瘡目が現われるのを防ぐ役目をする。

出土の縁に貼付いた漆膜層の断面が黄褐色であるのは、生漆が用いられていることをあらわしている。縁の織目空間への漆の浸透を良くするために、わざと経糸と緯糸の数を等しくして、織目が不偏的に透くように工夫したと考えることができる。普通の縁の織り方では経糸の間隔が詰まり過ぎて織目空間がなくなってしまうからである。

布着せの技法は、中国にあっては漢代にすでに広く行なわれていたから、出土の品が舶載品でないとはいひ切れないにしても、国産品である可能性は大きいであろう。

わが国における漆工芸は縄文時代以来のものである。古代における漆工芸品としては、腕輪・櫛・容器類・武具・伎楽面・仏像・厨子・棺・机・胡床などさまざまな品であるが、布着せのために縁のような高級平織物が使用されているところからみて、その工芸品は貴重な品であったと思われる。8cm×8cmという縁の大きさからすると、その品は櫛や腕輪よりも大きな品であったと考えられる。

なお、漆膜層の面にみられる粗い織物様痕跡の正体については、今のところ明言できない。

地下から出る銅製品は、刀剣や鏡などの器物に付着して棺内から出る場合が多いので、その年代を推定することは比較的容易い。しかし、本遺跡や坂尻遺跡の銅のように遊離状態で溝中の土に埋まっていた場合には、水に流されてきた可能性や後世混入の可能性も考えられることから、たとえその付近から年代の明らかな土器が出たとしても、それと同年代とみなすことは危険である。まして、本遺跡の場合のように、その附近から出土土器の年代が些か不明確であれば尚更のことである。

わが国で縁が使用されたのは、弥生時代後期から平安時代の間とみられるから、その間に比定することに誤りはないであろう。筆者としては、その間の比較的新しい時代のもののように感じられる。

有機物である絹が、粘土層や泥炭層の中ならばともかく、砂質層の中で長年遺存するとは考えられない。それにも拘わらず残存し得たのは、漆様物質が織物面を被い、さらにその繊維間にまで浸透していたために、腐蝕の原因となる空気や湿気や微生物から遮断し、織物を保護してきたからに外ならないと思われる。いずれにしても、絹織物が遊離状態で土中からじかに現われたことは珍しいケースといえよう。

稿を終えるに当り、調査の機会を与えられた袋井市教育委員会に感謝の意を表する。

(昭和58年3月11日原稿受理)

文 献

武 敏：「新疆出土漢～唐糸織品初探」(『文物』1962年、第7、8期合本、64～75頁、

沢口吾一：「日本漆工の研究」美術出版社、1972。

光芸出版編集部編：「うるし工芸辞典」光芸出版、1978。

布目順郎：「養蚕の起源と古代絹」雄山閣、1979。

布目順郎：「葛羅浦古墳群第1号墳出土の平絹と葛布について」(『古代学研究』印刷中)、1983。

第1表 鶴松遺跡出土の緯とその繊維についての調査

経緯 の別	色	繊維横断面についての計測値			織糸を構成する 繊維の数	織密度 (対1cm)	経糸数と緯 糸数の比
		完全度 (%)	面積 (μ^2)	供試繊維 の数			
経 緯	灰黒	48.1±4.12	40.0±3.73	30	46以上	65	1.00
	灰黒	43.8±4.01	33.2±3.25	35	60	65	
平均		46.0	36.6				

第2表 日本の緯とその繊維についての調査

時 代	繊維横断面についての計測値			織 密 度 (対1cm)			
	完全度 (%)	面積 (μ^2)	資料数	経 (本)	緯 (本)	経糸数と緯 糸数の比	資料数
古墳時代前期	57.0 (49.0-64.4)	73.1 (56.2-84.3)	6	76.3 (60-90)	38.8 (20-70)	2.46 (1.14-4.50)	4
古墳時代中期	55.3 (46.4-63.3)	69.9 (57.7-81.2)	8	54.8 (20-83)	24.4 (15-40)	2.31 (1.33-4.15)	8
古墳時代後期	62.4 (56.8-68.0)	71.5 (61.7-81.3)	2	50.0 (50-50)	27.5 (15-40)	2.29 (1.25-3.33)	2
奈良時代	50.2 (48.8-51.5)	52.5 (49.9-55.1)	2	100	20	5.00	1

備考 奈良時代のものは現に正倉院に蔵されている。緯と称されているが、その織糸には経・緯とも併糸がみられない。

第3表 中国の緯とその繊維についての調査

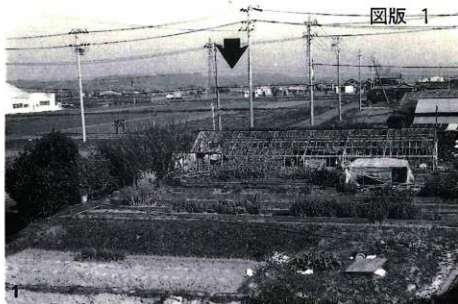
時 代 (括弧内は遺跡)	繊維横断面についての計測値			織 密 度 (対1cm)			
	完全度 (%)	面積 (μ^2)	資料数	経 (本)	緯 (本)	経糸数と緯 糸数の比	資料数
漢代 (陽高)	50.9 (46.7-59.2)	37.1 (29.6-44.4)	10	125.8 (95-150)	70.8 (40-100)	1.97 (1.30-2.80)	6
漢代 (楽浪)	51.5 (44.1-66.5)	48.3 (24.6-74.7)	12	80.0 (70-100)	38.0 (30-40)	2.11 (1.85-2.50)	6
北朝～唐初	—	—	—	68.0 (66-70)	36.5 (35-38)	1.86	—

備考 北朝～唐初のデータは武敏 (1962) による。

＜参 考 文 献＞

1. 袋井市教育委員会 1982 『鶴松古墳群・機ヶ谷古墳群』
2. 袋井市教育委員会 1982 『鶴松遺跡』（日本電信電話公社山科無線通信所建設に伴う緊急発掘調査概報）
3. 袋井市教育委員会 1983 『大門遺跡』—大門Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書—
4. 静岡県教育委員会 1965 『袋井市徳光遺跡発掘調査概報』『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』
5. 磐田市教育委員会 1983 『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
6. 浜松市教育委員会 1982 『伊場遺跡遺物編3』
7. 柴 田 稔 1983 「弥生時代の袋井市域」『袋井市史 通史編』袋井市役所
8. 鈴 木 敏 則 1983 「二之宮式土器について」『森町考古』18 森町考古学会

1. 遺跡遠景
(南より)



2. 1トレンチ全景
(南より)



3. 1トレンチ南半微
高地 (北より)





1. 1 トレンチSH1
焼失家屋(南より)



2. 1 トレンチ北半有
機質土層検出状況
(北より)



3. 有機質土層内土器
出土状況(東より)

1.2 トレンチ全景
(南より)



2.4 トレンチ全景
(西より)



3.4 トレンチSH4





1.3 トレンチ全景
(西より)手前マン
モール部拡張区



2.3 トレンチ全景
(東より)

2



3.3 トレンチSD1
2段に流路がある
(北より)

3

1. SD1 中層遺物出土状況、下層流路中に遺物が集中する、(北より)



2. SD1 遺物出土状況部分



3. SD2、中層より繊維製品(布)が出土した。





6



7



3



4



5



9



13



15



14



11



22



21



19



20

3 T SD 1 出土土器
(番号は挿図No.に同じ)



8



25

小形土器

(番号は挿図No.と同じ)



1



2



3



4

磨製石鏃、ノミ形石斧

肩平片刃石斧

(番号は挿図No.と同じ)



9



7



8

打製石斧、敲石、削器

(番号は挿図No.と同じ)



5



6



10



11

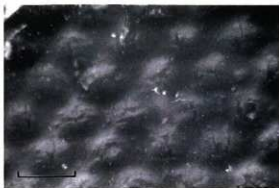
柱状片刃石斧、打製石斧

(番号は挿図No.と同じ)



第1図

織物の面。 Scale: 1 mm



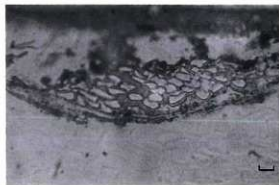
第2図

前図の反対面。漆様のもので塗り固められている。その面にみられる粗い織目様痕跡は、この面の漆様物質の上に貼付いていたかもしれない粗い織物の痕跡なのかどうか、明確なことはわからない。 Scale: 1 mm



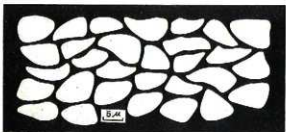
第3図

経糸の1つの断面。上方に漆様物質の層が見られる。下方に層状をなして見られるのは緯糸の側面。 Scale: 10u



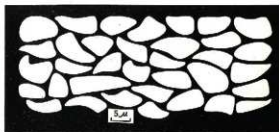
第4図

緯糸の1つの断面。上方に漆様物質の層がみられる。この層と緯糸断面との間に空間があるのは、この箇所では緯糸が漆様物質の層から浮き上がっていることをあらわしている。 Scale: 10u



第5図

経糸繊維の断面転写図。配置は任意
Scale: 5 u



第6図

緯糸繊維の断面転写図。配置は任意
Scale: 5 u

鶴 松 遺 跡 Ⅲ

(中部電力株式会社地中配線工事
に伴う緊急発掘調査概報)

1983年 3 月25日

発 行 静岡県袋井市教育委員会

〒437 袋井市国本3070-1

印 刷 株式会社 開 明 堂

〒430 浜松市中沢町1-1